広島市方言の対格標示

――談話資料による計量的把握――

小　西　いずみ

1　はじめに

本稿では、談話資料を用いて、広島市方言の対格標示のバリエーションを記述する。広島市方言の対格については、先行研究により、「サキョー（酒を）」など名詞末母音との融合が起こることが知られている。また、共通語・東京方言のくだけた話し言葉では、対格標示がφ（無助詞）となりうるが、『方言文法全国地図』（国立国語研究所1989）などの資料によると、広島県全域を含む山陽地方では対格標示がφ（無助詞）となる回答がほとんど見られない。こうした先行研究をふまえた上で、談話資料の用例にもとづいて、広島市方言の対格標示のバリエーションを計量的に把握することが本稿の主目的である。

また、本稿の副次的目的として、談話資料を用いた方言の計量的かつ記述的研究の有効性を検討することがあげられる。日本語各地域で共通語化が進行するなかで、方言の記録の蓄積・記述的研究の重要性が叫ばれ続けてきた。筆者は、方言の記述的研究のありかたとして、言語地理学的研究や、変異理論を含む社会言語学的研究の成果を生かし、特定の地域社会の言語体系を一面的・均質的に捉えるのではなく、変異を内包した重層的な体系として記すことが望ましいと考えている。本稿は、そのような意味での広島方言の記述的研究の、試行的基礎作業の一つとして位置づけられる。

2　先行研究

広島市方言の対格標示に関しては、河野（1959）と神鳥（1974）の記述がある。

河野（1959）は「広島辺」の対格標示を、対格名詞末の音ごとに次のように整理している。用語は本稿のものに置き換えている。

名詞末 i　　融合形 (C)juR　例）ヒュー（火を）、ムシュー（虫を）
　　i 単独語の場合は「イュー（胃を）」など「不完全熟合」。
　　e　　融合形 (C)joR　例）マヨー（前を）、ミョー（目を）、コガニョー（小金を）
　　e 単独語の場合は「エョー（絵を）」など「不完全熟合」。

a　長音形　例）ココアー（ココアを）、ター（田を）

o　長音形　例）オー（尾を）、カオー（顔を）、オトモー（お供を）

u　長音形　例）ウー（鵜を）、スー（酸を）、イヌー（犬を）

R　オ　例）ボーオ（棒を）、バターオ（バターを）

N　オ　例）ペンオ（ペンを）、ウドンオ（うどんを）

なお、河野は「広島市およびその周辺地では撥音の次の格助詞「を」はよく省略され」るとし、「レーテン　トッター（零点をとった）」の例をあげる。また、名詞末が a の場合、助詞「は」が付いた形も長音形となるが、アクセントが異なるとする。

神鳥（1974）の「広島市域方言」の対格標示の記述は、よりバリエーションに富むものとなっている。全体にオとなることは少なく、名詞末音により「長音化」「拗長音化」（本稿の融合形）、「語そのままの形」（φ）が現れるという。本稿の用語に改めて下に整理する[1]。

名詞末 i

1 モーラ語　融合形が多。40歳以下は長音形が多。例）キュー（気を）、チー（血を）。i 単独語「胃」は、「郊外」老年層で稀に融合形「ユー」。「市内」は長音形やオ。

2 モーラ語　尾高型（原文は「低起型」）の語は融合形 CjuR が多。平板・頭高型の語ではφが多、融合形は少。例）ス[ミュ]ー（墨を）、ウシφ（牛を；平板型）、[ハ]シφ（箸を）

3 モーラ以上の語　φが多。例）カガミφ（鏡を）

名詞末 e

1 モーラ語　長音形が多。郊外老年層では融合形 CjoR。例）テー・テョー（手を）。e 単独語「絵」は、長音形が多、郊外高年層で稀に融合形「ヨー」。平板型「柄」は必ず長音形。

2 モーラ語　平板型はφ、尾高・頭高型では融合形が多。例）サケφ（酒を；平板型）、[サ]キュー（鮭を）[2]。

3 モーラ以上の語　φが多、長音形も。例）モチゴメφ（もち米を）

名詞末 a

1 モーラ語　長音形が多。例）カー（蚊を）。

2 モーラ語　長音形が多。平板型はφも。例）ハ[ナ]ー（花を）、ハナφ（鼻を；平板型）

3モーラ以上の語　平板型はφが多、尾高・頭高型は長音形が多。例）センモンカφ（専門家を；平板型）、［ブ］ンカー（文化を）

名詞末o

1モーラ語　必ず長音形。例）コー（子を）。

2モーラ語　平板型はφ、尾高・頭高型では長音形。例）トコφ（床を；平板型）、［ネ］コー（猫を）。

3モーラ以上の語　φが多、長音形も。例）トンボφ（とんぼを）

名詞末u

1モーラ語　必ず長音形。例）スー（巣を）。

2モーラ以上の語　φが多。例）バツφ（罰を）、ミズφ（水を）。エンピツφ（鉛筆を）

名詞末R　φ。例）カラダジューφ（身体中を）、ケショーφ（化粧を）

名詞末N　φ。例）アンφ（餡を）、ザブトンφ（座布団を）

上のように、神鳥の記述では、2モーラ以上の語においてアクセントが平板型＞頭高・尾高型の順でφになりやすい。また、「郊外」よりも「市内」において、高年層よりも中年層以下において、また、意味上の焦点がある場合よりもない場合において、φになりやすい。上には反映していないが、市内の中年層以下では、意味上の焦点がある場合にオを用いることもあるとされる。神鳥の記述、特に、「郊外」と「市内」の差や高年層と中年層以下の差は、進行中の言語変化が共時的に反映されたものと思われる。

近隣では岡山県方言を扱う虫明（1970）や友定（1977）の記述がある。これらの関心は名詞末音による融合規則の記述にあり、その規則は河野（1959）の広島方言とほぼ同様である。最近では金田（2007）が、岡山方言では大阪方言よりφになりにくいことを実証的に示している。

『方言文法全国地図』（GAJ、国立国語研究所1989）には、対格標示の全国分布図として、第6図「酒［を］（飲む）」、第7図「俺［を］（連れて行ってくれ）」がある。第6図の略図を図1として示す。広島県内は第6図では融合形「サキョー」、第7図では融合形「ワシュー」が圧倒的に多く、第6図では特に県北部に「オ」の回答が混じり、第7図では「オ」や長音形「ワシー」の回答が混じる。特に第6図において、近畿や西伯耆～出雲、香川・愛媛ではφが多いのに対し、山陽地域の岡山・広島・山口県にはφの回答がない。対格だけでなく、主格（が）、主題（は）の図においても、山陽地域ではφがほとんどない。

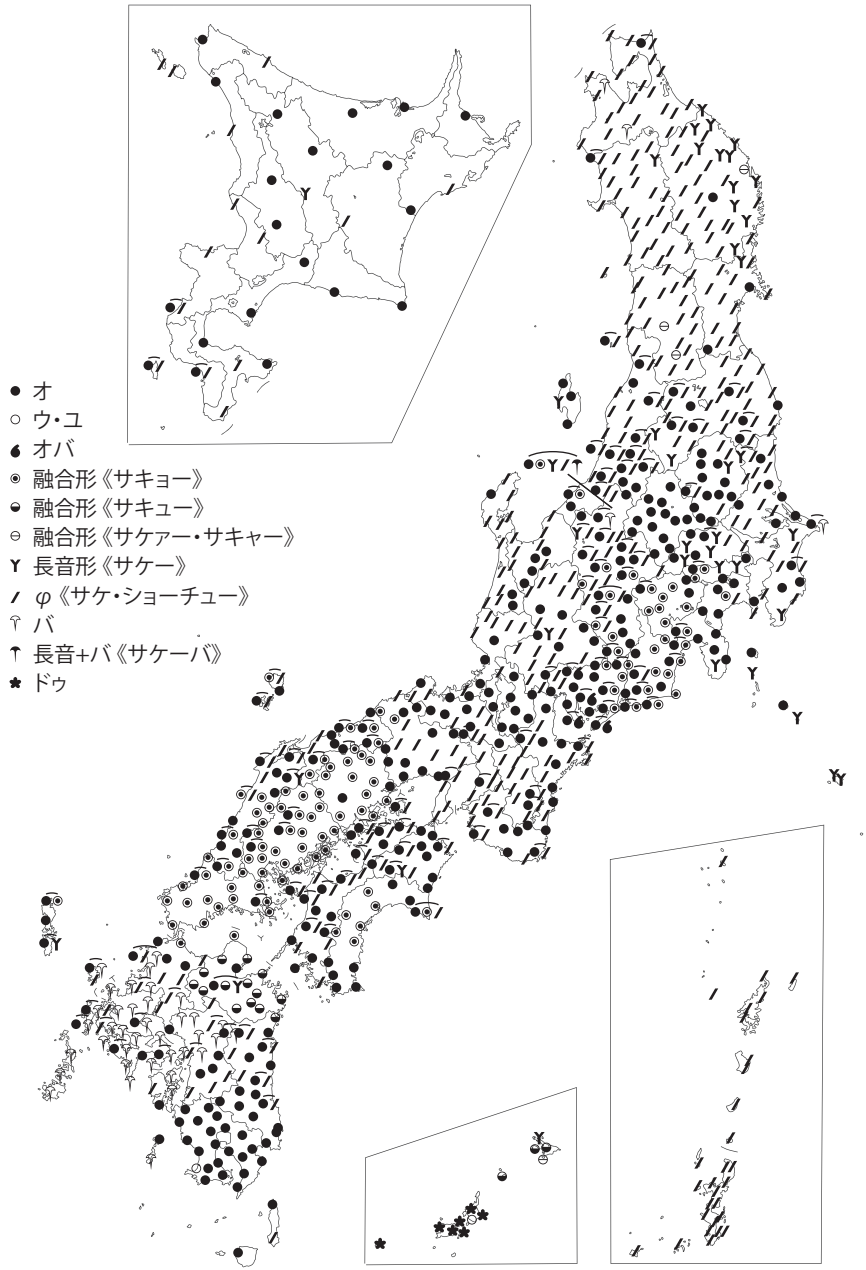

図１.「（酒）を」の全国分布（『方言文法全国地図』第６図略図）

3　資料と方法

本稿では方言談話資料として、『日本のふるさとことば集成』（国立国語研究所2002–2004）を用いる。広島市方言のほか、比較のために、東京都台東区・大阪市の資料も対象とする。それぞれの収録地点・収録年・話者属性は次のとおり。

広島県広島市古江東町（現・広島県広島市西区古江東町）　収録：1977（昭和52）年、話者：明治40年生・男性、明治32年生・女性、大正１年生・女性。ほかに調査者の発話があるが対象としない。

東京都台東区　収録：1980（昭和55）年、話者：明治44年生・男性、明治40年生・女性

大阪府大阪市東区（現・大阪府大阪市中央区）　収録：1977（昭和52）年、話者：大正３年生・男性、明治33年生・男性、大正１年生・男性、明治31年生・男性、明治37年生・女性、明治38年生・女性、大正３年生・男性

用例の採集は文字化テキストによるが、該当例については音声データを確認した。今回の対象地点については、ほぼ文字化テキストと用例認定が一致した。ただしテキストでは表記上の区別があるが、音韻・音声レベルでその区別を無効・不要とした場合がある（後述）。対格相当成分（意味役割が対格と対応する成分）に副助詞（とりたて・並列の助詞）が付いたもの、無助詞で主題成分とみなせるものも採集する。述語が省略されている場合も文脈から推定できるものは採用した。同一語句の繰り返しについては、まとめて１例と数えた。

4　結果と分析

4.1　バリエーションと頻度

広島の談話資料における対格標示を表１に示す。表１では、格標示と名詞末音ごとに用例数を示した。また、表２に東京・大阪の談話資料の調査結果を、図２に３地点を対照したグラフを示す。格標示の分類のうち、「融合形」は「ソリョー（それを）」など名詞末音との融合形、「長音形」は「ケガー（怪我を）」など名詞末音の長音形、「φ」は無助詞形、「φ（副助詞あり）」は格標示はないが、ダケやワ・モなどの副助詞を伴う形である。「φ（副助詞あり）」については名詞末音別に示す意味はないので合計数のみあげている。名詞末がｏの場合、テキストでは「オ」と「長音形」の区別がなされているが、音声データからその区別は困難と判断し、両者を統合する。また、音声データを確認すると、文字化テ

表１．談話資料における対格標示：広島市

			（内訳）名詞末音						
			i	e	a	o	u	R	N
オ	66	28.8%	21	28	6	−	0	5	6
融合形	33	14.4%	11	22	0	0	0	0	0
長音形	77	33.6%	5	8	21	40	3	0	0
φ	26	11.4%	2	2	7	5	0	10	0
φ（副助詞あり）	27	11.8%							
計	229	100.0%							

表２．談話資料における対格標示：東京都台東区・大阪市

	東京		大阪	
オ（名詞末 o 以外）	29	26.1%	25	16.1%
オ・長音形（名詞末 o）	14	12.6%	10	6.5%
長音形（名詞末 o 以外）	10	9.0%	0	0.0%
φ	42	37.8%	66	42.6%
φ（副助詞あり）	13	11.7%	46	29.7%
φ（主題）	3	2.7%	8	5.2%
計	111	100.0%	155	100.0%

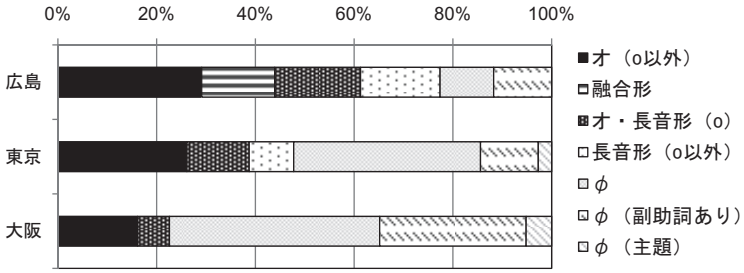

図２．談話資料における対格標示：広島・東京・大阪の対照

キストで融合形となっている例は、必ずしもはっきりと拗音になっておらず、オと表記されている例と連続的である。オと融合形の多寡について議論することはあまり意味がないと言える。

全体的に見ると、広島は、東京・大阪に比べ、φの頻度が約１割と低く、オ・融合形・長音形といった有形の対格標示の頻度が高い[3]。φが現れ得るという点では神鳥（1974）の記述と一致するが、神鳥の記述から受ける印象よりもφの頻度は低いと言える。また、神

鳥はオになることは少ないとするが、むしろオのほうがφよりも多い。

4.2　名詞末音によるバリエーション

名詞末が i の場合

河野（1959）や GAJ では、「タユー（鯛を）」「ヒュー（火を）」「ワシュー（私を）」など、末尾拍 (C)i と融合して (C)juR となるとされてきた。今回の談話資料では、融合形よりもオの例が多く、長音形やφの例も得られた。また、融合形には、CjuR が 9 例のほか、CjoR も 3 例ある。ただし前述のとおり、融合形とオとは連続的である。

(1) ホイデ　コシオ　オトシテ　マワラニャー　ワカランデー　コシオ　オトセヨ　コシオ　オトセヨ　ユーテ　シッカリ　アシー　アゲテ　ユーチャー。（それで腰を落として回らねばだめだよ。腰を落とせよ、腰を落とせよといって、しっかり足を上げてといっては。）[4]

(2) アラヒラー　モーテモ　ハ　ハナビュー　ツケテ　マウノガ　メッタ　ナインデスヨ。（荒平を舞っても、花火をつけて舞うのがめったにないのですよ。）

(3) マツリョー　ス　ショー　オモウンデ。（祭りをしようと思うので。）

(4) ンデ　ハー　アレモ　トシー　トラレタシネ。（それで、もう、あの人も歳をとられたしね。）

(5) ヘタ　ヘタナ　キャクワ　イレトキャ　マー　エー　テ　イヤー　ナニφ　ユーカコリャー　テ　ユーテカラ。（下手、下手な客は入れておけばまあいいと言えば、何を言うかこれはと言って。）

末尾拍が i 単独の対格成分は延べ 5 例あり、内 4 例が（6）（7）のようなオ、1 例が（8）に示すφとなっている。先行研究では「タユー（鯛を）」など融合形 juR となるとされているが、そのような例は得られなかった。

(6) レンシュースル　コトオ　マイオ　ナラス　ユーンデス。（練習することを舞を「ナラス」というのです。）

(7) ホイデ　ソコデ　アノ　ンー　ムコーノ　キカイオ　ツコーテ（それで、そこで、あの、うん、向こうの機械を使って）

(8) コズカイφ　タメニャー　ナランデショ。（小遣いを貯めなければならないでしょう。）

名詞末が e の場合

河野（1959）や GAJ では、「マヨー（前を）」「サケョー（酒を）」など融合形 (C)joR となるとされている。今回の談話資料では、融合形よりもオの例がやや多い（ただし両者は連続的）。長音形やφの例もある。

(9) コッカラ　ソノー　ハナカラ　ウエオ　アタマノ　カミモ　ゼンブ　アレ　シテ　メオ　ヤラレテ　ケンビョーインエ　ニューインシタ　コトガ　アリマス。（ここから、その、鼻から上を、頭の髪も全部あれして、目をやられて、県病院へ入院したことがあります。）

(10) アリョー　イレルト　フロー　ハイルトキニ　ヌカガ　ツカワレンケー（あれを入れると風呂に入る時に糠が使えないから）

(11) ホイデ　ソノ　タノミニ　イク　トキニ　サケー　モッテッテ（それで、その、頼みに行く時に酒を持っていって）

(12) アレφ　ナオサニャー　ナオサニャー　ユーユー（あれを直さねば直さねばと言いながら）

末尾拍が e 単独の場合、融合形 jo(R) があり、ほかにオや長音形も得られた。

(13) コドモノ　ゴロニ　アー　ソレコソ　テ　イッパイグライニ　ワラー　モッテ　ウヨー　コー　ネジテ（子供の頃に、ああそれこそ手いっぱいくらいにわらを持って、上をこうねじって）

名詞末が a の場合

河野（1959）は「ター（田を）」など長音形をとるとする。今回の調査では、長音形が多いが、オやφの例もあった。

(14) ナワー　ソイドケヨー　ユーチャー（縄をそいでおけよと言っては）

(15) ソースリャー　ターラオ　ホンナ　ツクランデ　スム。（そうすれば俵をそんなに作らなくてすむ。）

(16) ソー　ターラφ　コサエルヨーニャー　イカンジャケー。（そう、俵を作るようにはいかないのだから。）

名詞末が o の場合

河野（1959）では、「トー（戸を）」など長音形をとるとされている。今回の調査では、長音形が多いが、φの例もあった。前述のとおり、テキストでオとされている（19）のような例も、ここでは長音形と統合して集計している。

（17）ホトンド　ヌカデ　オフロー　ツカイヨッタンデスケー。（ほとんど糠でお風呂を使っていたのですから。）
（18）コノ　ミノφ　コシラエヨラレタガ。（この蓑を作っておられたが。）
（19）ハナシオーテ　イロンナ　アノー　モノオ　スルンデスヨ。（話し合っていろいろな、あの、ものをするのですよ。）

名詞末が u の場合

これも河野（1959）では、「イヌー（犬を）」など長音形をとるとされている。今回の調査では、長音形の例のみ 3 例得られた。

（20）アノネー　ミノヤラ　ワラグツー　コサエヨラレルノー　アリョー　ミタンジャガテレビデ。（あのね、蓑やら藁靴を作っておられるのを、あれを見たのだが、テレビで。）

名詞末が R の場合

河野（1959）は、「ボーオ（棒を）」など、オを使うとする。談話資料では、オよりφが多い。

（21）アノ　オニノ　オーキナ　ボーφ　モッテカラ（あの鬼の大きな棒を持って）
（22）ソリャー　ムカシャー　アノ　エンショーオ　イッキン　ヤロー　オモータラ（それは昔は、あの、煙硝を 1 斤やろうと思ったら）

名詞末が N の場合

河野（1959）は、「ペンオ（ペンを）」など、オを使うとするとともに、「広島市およびその周辺地区では撥音の次の格助詞「を」はよく省略され」るとする。今回の談話資料では、オ 6 例のみで、φの例はない。

(23) サンテンオ　ヤッテ　ホイカラ　コンド　アンドー　ヤルンデスカ。(三天（神楽の演目名）をやって、それから今度安道（同）をやるのですか。)

4.3　述語との隣接性

広島市方言の談話資料における対格標示において、φは名詞末 a・o の環境で比較的多く現れ、長音形とφとが相関する傾向を見せる。日本語諸方言における対格のφ標示については、松田（2000)、阿部（2009）などの先行研究において、述語との隣接性が言語内的要因として関わることが知られている。すなわち、φは、「花子が机を蹴る」のような、対格句が述語の直前に位置する環境で現れやすいとされる。

表３に、述語に隣接する環境（「隣」と略記)、それ以外の環境（「非」と略記）に分けた用例数、および、前者の％を示す。

全体として、述語と隣接する環境で現れる割合は、オと融合形が40％台であるのに対し、長音形は約78％、φは84％と高い。名詞末尾音素ごとに見ても、オと長音形の区別をしていない o の場合や用例数が少ない N の場合を除いて、隣接率がオ・融合形＜長音形・φとなっている。

表３．述語との隣接性と対格標示

				（内訳）名詞末音													
				i		e		a		o		u		R		N	
	隣	非	隣％	隣	非	隣	非	隣	非	隣	非	隣	非	隣	非	隣	非
オ	32	34	48.5％	12	9	11	17	4	2	−	−	0	0	2	3	3	3
融合形	14	19	42.4％	9	2	5	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
長音形	60	17	77.9％	5	0	6	2	18	3	28	12	3	0	0	0	0	0
φ	22	4	84.6％	2	0	2	0	6	1	3	2	0	0	9	1	0	0

4.4　名詞のアクセント型

神鳥（1974）の記述では、名詞のアクセントが平板型のとき長音形よりもφが出現しやすい。表４に、名詞のアクセント型と対格標示とのクロス集計を示す。名詞のアクセント型は、馬瀬（1994）を参考に、音声データにより筆者が確認した。１拍名詞の１型は尾高型に含めている。

この結果を見ると、平板型の場合にφが出現しやすいとは言えないが、尾高型の場合にφはやや少なく、長音形に偏る。ただし、前項で見たように、φの出現には述語との隣接性のほうが効いており、この点は長音形も同様である。φと長音形は類似・連続する形態

表４．名詞のアクセント型と対格標示

	平板	頭高	中高	尾高
オ	31	6	10	19
融合形	16	3	2	12
長音形	18	5	4	50
ϕ	11	4	7	4

であり、尾高型の名詞においてはそのアクセント（下降）の実現のために末尾拍が長音化しやすいという音声的な現象と解釈できる。

5　まとめと課題

本稿では、談話資料を用いて、広島市方言の対格標示を計量的に把握した。バリエーションとしてオ・融合形・長音形・ϕがあるという点では、先行研究のうち神鳥（1974）の記述と一致する。ただし、神鳥の記述ではϕが「市内」や中年層以下で増え、オは稀とされるが、談話資料では、ϕは確かに見られるものの全体の１割程度で、むしろオのほうが多いという結果となった。また、神鳥の記述は、ϕの出現にアクセント型が言語内的要因として関わるかのように読めるが、談話資料の用例からはϕの出現はアクセント型よりも述語との隣接性が効いていることが明らかとなった。

上のような先行研究と今回の調査結果との差は、言語変化の反映であるのか、あるいは、発話スタイルや調査法によるものなのか、今のところはっきりしない。より古い方言談話資料である日本放送協会編『全国方言資料』には安芸南部に位置する佐伯郡湯来町（現.広島市佐伯区湯来町）の談話も再録されている。今回の資料とこの資料を比較することによって、安芸南部の対格標示が、もともとこのようなバリエーションを示していたのか、近年の変化によるものなのか、確かめることができよう。

また、『方言文法全国地図』などによると、広島市を含む山陽域では、主格や主題標示についてもϕになりにくいようである。また、主題については融合形が現れるとされる。これらについても、談話資料を用いることにより、そのバリエーションとその選択に関わる言語内的要因を探ることができると思われる。

注

１神鳥は表の形にまとめているが、本文と厳密に一致しない部分があるため、ここでは本文に依拠した。

2「サキュー」は「サキョー」の誤りか。

3 大阪は、対格相当成分に副助詞のみが付いた例の頻度が広島・東京に比べて高いが、これは、談話の主な話題が船場ことばの特徴についてであり、方言形式を文の主題とする発話が多いためだと思われる。また、東京・大阪では、対格相当成分が主題φ形式となった例がそれぞれ3例・8例得られたが、広島ではその確かな例は得られなかった。これも2節で触れたように、『方言文法全国地図』などから、広島市周辺の方言では主題のφもとりにくいことが知られており、今回の結果もそれに整合する。この点は、主題標示の調査を別に行ってから再考したい。

4 方言発話の例示は基本的に文字化テキストに拠ったが、他の話者のあいづち等は除いた。また対格標示「φ」の記号を補った。共通語訳もテキストに従うが、一部改めた部分がある。

引用文献

阿部貴人（2009）「対話における無助詞化の地域差―東京・大阪・津軽方言の対照から」『月刊言語』38巻4号

金田純平（2007）「無助詞構文の方言間対照―備中方言と大阪方言を中心に―」『国際文化学』17号

神鳥武彦（1974）「「を」格の表示について―広島市域方言の場合」『広島大学方言研究会会報』22号

河野亮（1959）「格助詞「を」に当る広島辺での言い方」『音声学会会報』100号

国立国語研究所編（1989）『方言文法全国地図　第1集』大蔵省印刷局

国立国語研究所編（2002－2004）『全国方言談話データベース　日本のふるさとことば集成』第6巻、第13巻、第15巻、国書刊行会

友定賢治（1977）「助詞「を」「に」「は」表示の表現形態―備中方言の場合―」『島大国文』6号

馬瀬良雄編（1994）『広島市方言アクセント 辞典』中野出版企画

松田謙次郎（2000）「東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的要因の数量的検証」『国語学』51巻1号

虫明吉治郎（1970）「岡山方言の曲用」『操山論叢』5号

（広島大学）